

短期大学における学修成果目標の比較分析

－ JCCK スタンダード構築に向けて －

○平田孝治（西九州大学短期大学部） ○小浦康平（長崎短期大学）
 安部恵美子（長崎短期大学） ○藪敏晴（佐賀女子短期大学）
 ○中濱雄一郎（香蘭女子短期大学） 吉本圭一（滋慶医療科学大学）

1. はじめに

本研究は、九州地域における短期大学の連携活動（短期大学コンソーシアム：以下 JCCK と略）での参加短大相互の比較検討をふまえて、短期大学としての学修成果の標準化に向けて検討を行うものである。

近年、高等教育における学修成果の可視化が課題となり、大学学士課程では「分野別参照基準」などを通じた標準化への政策的な取組がなされているものの、短期大学にはそうした全国的な基準を探る動きは生まれていない。また、中教審の『グランドデザイン』答申（2018）の期待する「学修者本位の教育の実現」では、多様な履修モデルを作成することが一つの重要な要素にもなっており、学修成果を個性化・多様化させるという課題も示されており、標準化への道筋は不透明である。

我々は、これまでに JCCK の 7 加盟校に置かれる保育系並びに総合系の学修成果指標について、テキストマイニングの分析を行い、コンピテンシー能力要素別（概して態度・知識・技能・行動の要素）に学習成果指標を文章化（JCCK スタンダード Ver. 1）してきた（平田ほか 2020）。現在、さらにこの再現性の確認を含めて九州地区私立短期大学（対象 35 校）の指標から暫定的に Ver. 2 の検討を進めている（表 1, 2）。

表 1 保育系分野の短期大学教育プログラムの学修成果（JCCK スタンダード ver.2）

知識	① 「保育者として必要な専門知識を総合的に身につけている。」
	② 「子どもの成長と発達の段階と、子どもを取り巻く環境を理解している。」
	③ 「社会人・保育者として教養を含めた幅広い知識を備えている。」
技能	④ 「保育者として必要な支援的スキルを身につけている。」
	⑤ 「社会人・保育者として、物事に対して情報の収集にあたり、理解・処理することができる。」
	⑥ 「社会人・保育者として、対象者への適切な支援や、見出した課題の解決にあたることができる。」
態度	⑦ 「保育者として求められる理想像と子どもの環境・保護者の立場・地域社会への関心を持ち続けている。」
	⑧ 「地域社会・現場の様々な人との関わりのなかで、自分の役割への認識を高めていくことを目指している。」
応用	⑨ 「社会人・保育者として、適切なコミュニケーションをもって対応ができ、協調した行動をもって、地域社会・保育に貢献できる。」
	⑩ 「現場での、環境の構成を整え、保育を適切に展開できる。」
	⑪ 「保育での新たな発見を見出し、課題解決に向けて協働・対応していける。」

表 2 総合系分野の短期大学教育プログラムの学修成果（JCCK スタンダード ver.2）

知識	① 「社会人・職業人として、幅広い知識をもっている。」
	② 「様々な文化的背景を理解し、物事に対して分析、把握して自ら判断していける。」
技能	③ 「社会人としての素養を備え、職業人として必要な ICT・コミュニケーションの情報スキルの基本を備えている。」
態度	④ 「グローバルな視点を備え、新しい価値の創造を志している。」
	⑤ 「様々な人との関わりのなかで、自分への認識を高めていくことを目指している。」
応用	⑥ 「社会人・職業人として、様々な人との交流・協働ができ、行動をもって地域社会に貢献できる。」

しかし、各校の学位授与の方針(DP)と、これに書添えられる学修成果指標等は、表に示すような短い文言の中で具体性を網羅することは困難であって、用語に含められる意味の違い等が生じる可能性もある。そこで共通性を抽出する際には、一定範囲の抽象化のレベルを上げることが避けられないものとなった。学修成果スタンダードは、“学修成果のベーシック”としての機能が期待されるところであるが、その簡潔さ故に文章や用語が意味するところの説明（共通理解）が必要と考えている。

本研究では、学修成果スタンダードの試作版としての Ver. 2 について、次の 4 つの視点から検討を行う。第一に、短期大学の学修成果は、大学の学術研究中心の教育や専門学校の職業直結型教育と異なり、基礎教育と実践教育を融合させた特性を持つ。本研究では、短期大学が持つこの独自性を明確にするため、各教育機関の学修成果の到達目標やカリキュラムを比較し、短期大学の特性把握を行う。

第二に、短期大学間の学修成果の相違点を分析するため、JCKC スタンダードのフレームワークを用い、九州地区における短期大学の学修成果を比較する。本研究では、DP の記述内容を分析し、学科特性による学修成果の違いや活用を考察する。

第三に、DP と一体的に運用されているカリキュラムポリシー (CP) において短期大学で重要な地域と関わる実践活動に着目し、PBL (課題解決型学習)、就業体験型学習 (インターンシップ) などを中心に、短期大学における学修成果との関連性を整理する。これにより、学修成果がどのような実践活動を通じて達成されるかを検討する。

第四に、標準化のモデルとしての学士課程分野別参照基準との比較を行う。これまでの JCKC スタンダード Ver. 2 では、学科ごとの学修成果の評価基準が明確でないという課題があった。本報告では、分野ごとの学修成果をより可視化し、その方向性を考察する。

(平田孝治・小浦康平)

2. 大学・専門学校との比較

本研究では、短期大学が持つこの独自性を明確にするため、各教育機関の学修成果の到達目標やカリキュラムを比較し、短期大学の特性を示す。各教育機関の学修成果の到達目標やカリキュラムの違いについての研究は様々な論文・報告書が発表されている。

吉本 圭一ほか (2020) は、学修成果と職業コンピテンシーを表現するために、「知識」「技能」「態度」「現場の文脈における知識・技能・態度の応用」の 4 次元のタキソノミーによる記述語で表現されたものであると定義した。また、大学と専門学校の学修成果の違いについてビジネス分野での学修成果マトリクス策定と確認を行い、大きく 3 つの知見が得られている (表 3)。

表 3 大学と専門学校の違い、3 つの知見(ビジネス系)

知見	比較の観点	大学学士課程	専門学校専門課程
教育機関が目標とする学修成果の違い	学修成果	基礎的なレベルの特定目標に焦点、上位の MBA レベルへの取り組みなど、機関間での多様性	「態度」など基礎的レベルを確実に習得させ上位の目標に取り組む積み上げモデル
機関の目標と卒業生の在学中の修得認識のギャップ	「態度」醸成の課題の認識 「態度」「応用」の獲得	機関と卒業生ともに認識あり 「演習や実習などの授業」「インターンシップなどの学外演習」の重要性	機関と卒業生ともに認識あり 産業界と連携した実習等が教育プログラムの要件であり、実践的な修得機会が充実
職業現場でのコンピテンシー形成の構造	ビジネスマナー・コンピュータ技能	現場での職業訓練を通して卒業後に習得	在学中に多く習得

出所:吉本ほか(2020)をもとに著作作成

ここで、各教育機関の教育体系、資格取得とキャリアパスの違いを考えると、以下の表でまとめられる (表 4)。

表4 教育体系、資格取得とキャリアパスの違い

教育機関	区分	期間	特徴	学修成果	キャリアパス
短期大学	高等教育	2～3 年	〔実践+教養〕重視 基礎教育と実践教育のバランス	学術分野と職業分野を 調和させたカリキュラム	(実践応用的) 就職+資格取得+大学編入
大学		4 年	〔理論+専門〕重視 理論中心の高度な学術教育	学術分野を基本にしたカリキュラム	(学術専門的) 専門職+研究職
専門学校	専修学校	1～3 年	〔実践+特定専門〕重視 職業直結型のスキル習得	専門職業から求められる 特定の成果	(実務職業的) 特定職種直結

この表 4 を踏まえると、短期大学の総合系は大学よりも実践的な教育を重視し、専門学校よりも広範な教養教育を提供するというカリキュラムの特徴を持つと考えられる。

同じく短期大学の保育系については、学校教育法で定められている高等教育機関の設置目的の中で「実践」と「応用」は明確に差別化して使用されていることから、実践的という面において大学よりも専門学校に近いカリキュラムの特徴を持つと考えられる。

短期大学の学修成果は、大学の学術研究中心の教育や専門学校の職業直結型教育と異なり、基礎教育と実践教育を融合させた特性を持つといった特徴が考えられる。

(小浦康平)

3. 標準化された学修成果の各短期大学への適用

各短大の DP および学修成果の記述方法はさまざまである。例えば S 女子短大では、学修成果が DP に基づいて定められた「評価基準」という形で示されており、各コースの DP は、最初に全学共通のものを、2 つ目以降に各専門分野の DP を数項目設定、各項目の下に評価基準(=学修成果)を定めている。これに対して、N 短大では、短大全体のディプロマ・ポリシーを 5 項目定め、それに紐づけるかたちで、各学科・コースの人材育成の到達目標(=学修成果)を設けており、項目ごとに 2~5 個の学修成果のベンチマークを置いている。

そして、このような異なる記述方法を相互に了解可能とするために、スタンダードでは、知識・技能・態度・応用というコンピテンシー能力要素別にそれを標準化している。そうすると、ここで策定されたスタンダードは、各短大の学修成果との間でどのような関係にあるのか。つまり、スタンダードを前提にする場合に、各短大が、自学の教育にこのスタンダードをどのように適用することができるのかを検討する。

専門に特化した分野である保育系では、配列の順序は異なるものの、記載されている内容についてはスタンダードと各短大の間に大きな差異は見られない。このような分野では各短大は、スタンダードを自学の学修成果のベンチマークとすることが期待される。例えば、S 女子短大の DP/学修成果には「課題発見・解決」に関する記載がないが、それらを明文化する必要があるのか、あるいは、それが「実践」という言葉に含まれると考えるのか、自学の教育内容とそれを言語化した学修成果の記述について、改めて検討する契機となるだろう。

総合系のスタンダードを個別の短大と比較してみると、テキストマイニングによる標準化の過程で弾かれてしまう部分に、短大らしい学修成果がクリアになっているケースがある。日本型のコミュニティカレッジとして構想された地域総合科学科に代表される総合系の分野は、学際的な教育内容をその特徴としているのだが、スタンダードではその部分が弾かれてしまう。また、地域への理解や関わりを深めることは、学生が職業人として育ってゆくときに、短大の教育として最もこだわっていることのひとつである。例えば S 女子短大の DP/学修成果には、「地域理解」や「地域社会の活動に主体的に参加する」という表現が出てくるが、スタンダードでは「様々な人との関わり・交流・協働」といった、より一般的な表現に変換されている。Ver. 2 の確立に向けて、テキストマイニングの手法で標準化された表現に、どの程度固有の表現を盛り込むべきなのか、今後の検討課題であろう。

(藪敏晴・安部恵美子)

4. 標準化した DP から短大固有の CP への一体的実践的運用

高等教育の 3 ポリシーについては、特に DP と CP の一体的運用が強く求められており、JCKK で DP に向けた基準を設定するときに、どのように短大としての固有の CP を展開することができるのだろうか。K 短期大学の総合系に注目して検討する。ここでは、K 短期大学の服飾系のファッション総合学科、ライフプランニング総合学科(以下、LP 学科と標記。2005 年設置)を扱う。中でも LP 学科のカリキュラムの特徴は、基礎教育と実践教育の融合であり、近年はインターンシップや PBL に力を入れ、汎用的スキルの向上と学習成果の可視化を意識した教育を展開している。

具体的には、学生たちのニーズを汲み取るため、職業体験・理解を主な目的としたインターンシップの実施を本学のキャリアセンターから直接依頼するものと、九州インターンシップ推進協議会へ依頼するもの(令和 3 年退会)と 2 系統準備し、募集を行ってきた。同時に、近隣の地域の皆さま、企業様へ直接依頼し、地域チャレンジ(課外活動)もしくは地域創生という授業枠で PBL を行っている。

特に、地域創生という授業枠は、学生とともに地域で活躍する人材育成を目標に、1 年間で 3 つの授業でリレーさせ、学内で外部へ出たときの学びを行い、グループワークやプレゼンテーション力の向上を目指して実施している。同時に、外部機関と連携し、地域おこしや企業から提示される課題を解決するために週末や祝日、長期休暇などの時間を使って学びの成果を確認している。

なお、LP 学科では、2017 年に大幅なカリキュラムのリニューアルを行い、教育目標および 3 ポリシーの改定、並びにアセスメントの一環として 1 年次、2 年次にそれぞれ PROG テストを導入した。その中

核理念は、汎用的スキルとして定義された学科独自の基礎教養スキルが本当に定着しているのかどうかを可視化することであり、本学科での学びの成果としてコンピテンシースキルが伸長しているかを確かめることにある。

本報告では、JCKK で検討してきた標準化した DP をもとにして見た時に、LP 学科の DP および CP がどのように一体的に運用され、実践的に活用しているのかを確認し、短期大学固有の教育の可能性について提示する。

(中濱雄一郎)

5. 学士課程分野別参照基準との比較

学修成果の標準化に向け、短期大学における分野別の参照基準を検討する。共通基準、専門基準、そして実践基準の3点を考慮する。大学教育の分野別質保証委員会（日本学術会議）が作成した学士課程の個別の参照基準は、各大学における教育課程編成の参考として、学問としての分野特性の中で目指すべき基本的（理想的）素養として、「知識と理解」、「能力」、「ジェネリックスキル」、そして「市民性の涵養をめぐる専門教育と教養教育との関わり」ほかが記されている。

保育系スタンダードは、学問分野が確立した学士・短期大学士の17の分野（吉本 2019 参照）の中では、教育学・保育学関係及び家政関係の分野が関連付けられる。分野別参照基準からは家政学と教育学が比較できる。

一方、学際領域については、複数の学位の分野にまたがるものであり、関係分野も一様ではないことから、分野別参照基準は示されていない。学際領域となる総合系学科の多くは、学位の種類でいえば「文学関係」と「家政関係」が統合されたものであり、その中に各校それぞれに、ファッションコーディネートや、美容、ブライダル、インテリア、医療事務等々、若者のニーズに合わせた分野が加えられているのが実態である。そのため、総合系の「スタンダード」は、分野別参照基準からは言語・文学、家政学、社会学、サービス学分野といった広範な学問分野を参照することが必要となる。他方、大学とは異なる固有の軸として、短期大学は、地域コミュニティに密着したアクセスという特長を有しており、その特徴からの基準づくりが重要である。4年制大学と比較して自県進学者率や地元就職率は高く、所在地域に根差した短期高等教育機関として機能している。このことから、これらの職業分野に加えて、地域性などを含めた短期大学固有の軸も必要と考えられる。

JCKK スタンダード Ver. 2 と分野別参照基準とを具体的に比較して、現実を踏まえた理想的なスタンダードの検討を行うなかで、JCKK スタンダードは、実際の現場から得た“学修成果のベーシック”として達成すべき基準とも考えられ、分野別参照基準とは観点が異なることに留意する必要がある。JCKK スタンダード Ver. 2 は、必ずしも関連付けられた特定の学術の分野別参照基準に適うものではなく、固有の参照基準が必要ではないかと考えられた。

以下、これらの分析を通じて、短期大学における学修成果スタンダードの整備に向けたいくつかの可能性を提示する。特に、実践的な学修成果の評価方法の標準化と、短期大学間での比較可能な枠組みの構築が今後の課題であり、大学とも専門学校とも異なる固有の基準を、学術分野のコミュニティからではなく現場コミュニティの対話の中から構築するための課題を論じることとする。以下、詳細は口頭発表資料を参照。

(平田孝治)

参考文献

- 吉本圭一（2019）「教育と訓練をめぐる専門分野分類再考—第三段階教育の学術性と職業性」九州大学大学院人間環境学府『教育学研究紀要』（21），25-44 頁
- 吉本 圭一、亀野淳、江藤智佐子（2020）「第三段階教育における学修成果と職業コンピテンシーの対応に関する研究—大学と専門学校のビジネス分野を対象として—」九州大学大学院人間環境学府『教育学研究紀要』（22），pp. 11-42
- 平田孝治、安部恵美子、藪敏晴、吉本圭一（2020）「学修成果の JCKK スタンダード構築に向けて：7 短期大学の「学位授与の方針」に係る指標の比較分析」短期大学コンソーシアム九州『短期高等教育研究』（10），pp. 5-20
(<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I031302216>, 2025 年 3 月 20 日最終取得)